

番組制作における情報の構成方法・ 伝達方法の大学授業との差異について

Differences in Contents and Expressions between University Courses and University TV/Radio Programs.

名古屋大学 助教授 大谷 尚

要約：大学放送公開講座の番組制作に際し、大学の授業とは異なる内容構成や表現方法を必要とした点は何かについて、テレビ講座とラジオ講座の全出演者と制作担当者にアンケート調査を行い、その結果をテレビ、ラジオで対比させて考察した。さらに、テレビ講座とラジオ講座の出演者の態度の違い、出演者と制作者の意識のずれ、総合的な対策と展望などについて述べた。

キーワード：放送教育、大学公開講座、アンケート、テレビ、ラジオ、授業

1. 研究の目的と概要

放送利用の大学公開講座の出演者のほとんどである大学教員は、大学での授業の経験^{註1}を有しており、それに慣れている。しかし、放送番組は、大学の授業とは異なるメディアの特性、対象（視聴者）の特性、時間的制約等を有している。番組制作に不慣れな大学教員が効果的な番組を円滑に制作できるようにするためには、放送番組の持つこれらの特性を考慮して、情報の構成・伝達を、大学の授業とは異なる方法で行うことが必要となる。

いっぽう、大学教員は、学問研究の自由を保証されているが、放送は、その公共性などを重視する点から、社会的なさまざまな要請と制約を受けており、テーマによっては、大学の授業とは異なった、慎重な内容の構成が必要とされる場合がある。

このような点について、各出演者や制作スタッフは、個別に多様な経験を有していると考えられるが、これまで、それらが集約され、継承される場がなかった。

本研究は、このような問題を検討するために、平成5年度の放送公開講座の出演者と制作担当者を対象に、番組制作にあたって大学の授業とは異なるあり方を必要とした点などについてアンケート調査を行い、その結果を分析したものである。

2. 平成5年度の名古屋大学放送公開講座の概要

1) テレビ講座

テーマは「長寿を考える」で、4部構成（PART1.「長寿」を見つめる－高齢者のこころ－、PART2.「長寿」を科学する－老化の生物学と病気－、PART3.「長寿」を支える－医療・福祉・街・法律－、PART4.「長寿」を迎える－健康と生きがい－）、全18回。出演講師はほ

は全部局から参加し、20名（内、名古屋大学外は2名）であった。

2) ラジオ講座

テーマは「開発とは何か」で、3部構成（プロローグ（1回のみ）、PART1.国際開発－課題と展望－、PART2.国際協力－開発のなかの文化・社会－）、テレビと同じく全18回。出演講師は、本学大学院国際開発研究科を中心とする19名（内、名古屋大学外は1名）であった。

3) 本年度の番組制作の手順

本年度の方法は、本学におけるこれまでの方法と、大きく異なる所はない。テーマ決定、出演者決定、出演者へのテキスト原稿依頼、原稿完成、完成原稿の担当ディレクターへの送付、ディレクター側での番組構成案の作製、テキスト印刷、ディレクターと出演者との数回に渡る話し合い、ロケ、収録、編集、の手順で進められた。

3. アンケート調査について

1) 調査のねらい

この調査は、上記の問題についてのなんらかの仮説検証ではなく、この問題に関わる出演者等の経験を少しでも拾い上げることをねらいとしている。普段から放送公開講座のあり方や、メディアの特性に特に関心を持っている一部の方を除いて、上記のような問題は、特に意識しないと考えられるため、かなり多くの質問を刺激として提示して、反応を期待した。

2) 対象

アンケートは、上記の全出演者ならびに、制作担当者（テレビディレクター5人、ラジオディレクター2人、両番組の女性司会者2人）全員に配布した。制作担当者の全員と、出演者ほぼ全員から回答を得た。

3) 内容・構成

アンケートは、出演者に対するものと制作者に対するものとは、細部が異なるため、2種類用意した。しかし内容はほぼ同一である。次に示す例は、出演者に対するものである。（このアンケート自体を、資料としてこの報告の最後に付してある。）各項目は、複数回答可能な多肢選択にし、経験の多様性を配慮して、それぞれに具体例を記述して頂く欄を設けた。全体でA4版9ページの構成であった。

- I. 当該メディアへの過去の出演経験と今回の出演に不安を感じた点
- II. 内容面について
 1. 内容構成への配慮
 2. 内容選択への配慮
- III. 方法面

1. 普段とは別のことばに言い替えた用語
 2. 表現の形式への配慮
 3. 放送番組での制約
 4. 大学の授業よりも効果的に情報伝達が行えた面
- IV. 大学の授業と放送番組との本質的な違いは何だと考えるか
- V. 番組構成・出演の経験の大学での教育・研究へのメリット
- VI. 今後の出演者へのアドバイス

4. アンケート回答結果の分析と各項目ごとに得られた知見の要約ならびに問題への対策

回答結果は、必ずしも適切な場所に記入されてはいなかったため、質問項目にはこだわらず、内容によって、調査者側で次の1)－8)の項目に分類して再構成した。結果は、テレビとラジオごとに別にまとめ、対比できるように以下に記した。

なお、本研究は、あくまで、本学の本年度の実施に関するケーススタディーである。たとえ本学であっても、異なる年度に実施すれば、テーマによって、また、出演者と制作者の違いによって、異なる結果を得るものと考えられる。

以下の記述中、[]つきの数字を伴っている記述は、出演者からの回答であり、数字はその回答をした出演者の当該メディアへの出演回数（何回目か、「初」は初出演）である。[制]は、制作者側からの回答、または、制作者側からの要求についての出演者側からの回答。どちらも伴わないものは、調査者がまとめた項目である。なお、重複する記述が多くても、以下には代表的なもののみを記してある。なお、きわめて常識的な記述は省略している。

それぞれの項目ごとに、得られた知見と、調査者側の若干の解釈を記してある。

1) 不安を感じた点

テレビ

- ・どのくらい時間がかかるのか見当がつかなかった [初]
- ・本番で上がらないか心配だった [初]
- ・リハーサルがあると思っていたのに、なかったので緊張した [初]
- ・対象（視聴者層）を把握できなかったこと [11回目]

ラジオ

- ・どの程度の話でいいのか確信が持てなかった [2回目]
- ・29分で正確に終われるか心配だった。若干の編集が可能だと後で知った。[初]

公開講座初出演者、特にテレビ講座への初出演者は多くの不安を感じている。そして過去にいくら多くのテレビ出演の経験があっても、公開講座に初出演する者は特有の不安を抱くことが分かる。

また、ラジオ講座出演者もやはり不安を感じている。特に本学の場合、ラジオ番組の、収録（録音）後の編集は原則的に行わ^{注2}ないので、収録の時間制限に対する不安や緊張が読み取れる。この不安を解消する工夫が必要である。

2) 授業との違い

テレビ

- ・絶対に一回で完結させる必要があること [4回目]
- ・視聴者の多くが社会的な経験を積んだ人々であること [11回目]
- ・取材などしてくれることは授業では考えられない [21回目]
- ・特殊な映像も制作してもらえること
(例) 水中の映像 [5回目]
- ・幅の広い教養の一環として専門的知識を提供する点 [11回目]

ラジオ

- ・大学では多面的に話しているが、一回完結なので、一断面しか話せない。[初]
- ・一回完結なので授業とは完全に異なる。[11回目]
- ・学生とほぼ同じ水準の内容で話した。[初]
- ・大学でも「しろうとに教えるように平易に」を心がけているので違わない [2回目]

番組が、一回で完結させなければならないという点は、通常の大学授業と大きく異なる点であり、大学教員が慣れていない点であるため、テレビ、ラジオの両出演者共通の重大な問題点になっているようだ。

また、テレビ講座の出演者は、大学の授業との違いをかなり意識している。それに対して、ラジオ講座の場合、このように授業と同様に行ったという記述もあり、大学授業との違いが強く意識されていない面がある。これについては、6で再び触れる。

3) 他の番組との違い

テレビ

- ・事前の打ち合わせや指示が詳細 [6回目]
- ・内容の決定に時間がかけられる点が他の番組と違う [制]
- ・楽だが他力本願的で制作者として満足度が低い [制]

ラジオ

なし

テレビ講座の場合、他の番組と公開講座番組との違いとして、出演者、制作者ともに、詳細な準備が行える点をあげている。ラジオでは、本年度の本講座出演者のなかには、他のラジオ番組への出演経験者が多かったが、他の番組との違いに関する記述はなかった。

4) 内容構成上留意した点、留意すべき点

4. 1) 内容構成への配慮

テレビ

構成の仕方

- ・テキストの内容を分解して番組用に再構成する必要があること [制]

他の回のテーマや全体構成の把握

- ・他の回のテキストをすべて読んでおいた [4回目]

ラジオ

対象について

(例) 聴取者のレベル(対象)をこちらから積極的に設定したほうが良い [初]

他の回のテーマや全体構成を把握しておくことについて

- ・他のテキストを読んだ [初] [2回目]

番組の形式についてテキスト執筆段階で知っておくべきという指摘

- ・アシスタント(司会)の質問に答えるという形式を知っておくべきだった [2回目]

本学の場合、テキストは完成時まで制作側には見せておらず、執筆後に番組制作の打ち合せが始まるので、執筆したテキストの内容や構成が映像表現に適さない場合が生じる。その際にテキストにとらわれていると良い番組ができないので、番組ではテキストの内容を再構成してほしいという要請が制作側から指摘されているわけである。

なお、出演者が自分の担当しない回の内容を把握しておくためには、テキスト全体を読んでおくことが有効であり、テレビ、ラジオともに、実際そうしている出演者が多いことが記述から分かる。

4. 2) 内容選択への配慮

テレビ

- ・最も伝えたいポイントを一つもつこと [制]
- ・映像化できる内容を用意すること [初]
- ・各回のテーマが重複しないこと [制]

ラジオ

なし

「ポイントを一つにしぼる」ことは、放送講座では重要な指摘であり、テレビで指摘されている。また、テレビの場合、「映像化できる内容を選ぶ」ことは特に重要な指摘である。出演者は、テキスト執筆段階から、このような点を考慮した上で、自分の番組のイメージを作ると良いと考えられる。

ラジオ講座では、回答がなかったが、これは、今回のラジオ講座では、「開発」というかなり絞られた焦点化した内容を、多くの隣接する専門の研究者が担当したため、各回の内容が稠密化して、選択する範囲が初めから限定されていたためではないかとも考えられる。

4. 3) 避けた内容

テレビ

先端的な研究知見

- ・「痴呆の薬物療法」を避けた [4回目]
- ・「成人後見制度の改革方針」を避けた [初]

価値観に関わる内容

- ・「不老不死」の可能性について言及しなかった [初]

社会的なコンセンサスを待つべき内容

- ・「安楽死」について避けて頂いた [制]

時間をかけないと説明できない内容

- ・避けるよう要求した [制]

ラジオ

私的な経験談、逸話等に関して

- ・普段の授業でも避けている内容なので避けた [6回目]

テレビ講座では、以上のような内容を避けている。しかしながら、ラジオ講座では、このような内容を避けたという記述がなかった。

(これについては、次の4. 4を参照。)

4. 4) 積極的にとり入れた内容

テレビ

具体的なハウ・ツールの話題

- ・遺言の具体的な書き方に触れることを要求された [初]

視聴者の最も関心の高い話題

- ・「長寿科学」について話すことをお願いした [制]

ラジオ

導入

- ・開始早々に興味をひく内容をまず示して欲しい [制]

- ・自分がこの問題にのめりこんだわけについて話した [6回目]

先端的な研究知見

- ・オリジナリティーの高い主張を積極的に展開した [2回目]

- ・私的な経験談、逸話等はできるだけとり入れたほうが効果的 [制]

テレビ、ラジオともに、出演者は、制作者に、魅力的な導入や、番組にめりはりを付ける内容を要求されていることが分かる。また、4. 3) で記した、テレビ講座では避けられている内容が、ラジオ講座ではむしろ積極的に取り入れられていることが分かる。

5) 表現上の留意点

5. 1) フリップの簡略化 (テレビのみ)

- ・4対3のフレーム、解像度の限界のため [制]

- ・テレビ画面の情報量に合わせたフリップの構成 [制]

- ・文字の多いフリップはその説明にさらに何倍もの時間がかかる [制]

フリップを授業での配布レジюмеと同様に考えてはいけない。フリップの情報量は予想以上に小さいことを理解しておかなければならない。

5. 2) ラジオの音声のみという制約に関して

- ・同音異義語に気がつけた [初]

- ・耳で聞いて分かりやすいことばにかえる「政府間援助→政府が行う資金援助 [11回目]
- ・数量的表現を具体的表現にかえる「〇〇万ヘクタール」→「九州の大きさ」[11回目]
- ・年号や地図が使えない（視覚的表現が使えない）[初]

やはり、ラジオ特有の、音声のみという条件下でも明確に伝わるような表現方法が模索されている。制作側は、そのような手法をノウハウとして有していると考えられるので、表現を置き換える手法や補う工夫を制作側から提供してもらう必要がある。

5. 3) 差別語、不快語、差別表現、不快表現等

テレビ

言い替えを要する

- ・老人、おじいさん、おばあさん→高齢者 [4回目]

ことがらのマイナス面の内容を表現する際に注意する

- ・老人層の、みにくい面を表現するのに一般的な表現にした [11回目]

専門用語が差別語、不快語になる恐れもある

- ・高齢者、老人、お年寄り、老年者 [11回目]

文献を引用する際もその中の差別語、不快語等に注意する

- ・「百姓のせがれ」[4回目]

ラジオ

なし

こういった表現は、出演者は常識的に避けようとするが、出演者が気づかないで、制作側によく指摘されるものは、上の例のように、専門用語である。社会ではすでに避けられて、言い替えが進んでいる語も、専門用語としては、そのまま使用されていることがある。また、研究者は、原典を尊重する立場から、引用などの際にはそのまま紹介するが、その文献内の用語や表現にも注意する必要がある。なお、大変興味深いことは、これらの記述は、ラジオ講座では見られなかった。

5. 4) 誤解されるような表現を避けた

テレビ

酸素は有害（大学側出演者）

ラジオ

なし

これもテレビについてのみ回答があった。このような表現を、研究者は避ける傾向があるが、その点で制作側と対立することもある。これについては、(5. 7) で再び触れる。

5. 5) 固有名詞の正確な読みに留意する必要

テレビ

地名などの正確な読み

- ・〇〇町は、「〇〇まち」か「〇〇ちょう」か [初]

ラジオ

なし

研究者にとって、主たる研究発表のメディアは、通常は著書や論文であり、文字で著すので、読みを正確に知っていることを求められない。また、授業は、あるていど閉じたインフォーマルな場であるためか、このようなことは問題にならない。しかし放送は、テレビ、ラジオとも、音声を用いた公表の場であり、このことが問題となる。ただし、これもラジオでは記述がなかった。これは、今回のラジオ講座のテーマが、国際開発であり、外国語の固有名詞が多かったためかもしれない。

5. 6) 人権、肖像権等 (テレビのみ)

- ・画面に出た人の人権に配慮 [4回目]

テレビ特有の問題で、今後重視していくべき点である。

5. 7) 表現のインパクトの強さ

- ・アシスタントによる誤解するくらいのリアクションが必要 [制]

(例、「酸素が有害だなんて!」)

制作側はやはり、このように番組にアクセントを付ける努力をしている。しかしこれが出演者と対立することがあり、このような表現を避けたという出演者の記述が5. 4)にある。

5. 8) 話し方に関する注意点

テレビ

- ・視聴者が文脈をたどれるような話し方が必要 [制]
(例「以上はこういう内容で、ここからはこれについて話します」等)
- ・秒単位の調整が要求されることを知っておくべき [初]
- ・受講者の反応がないので速くなりがち [制]
- ・早口でけわしい表情→ゆっくり、にこやかに [初]
- ・声の大きさに波がないよう一定に [制]
- ・自主的なりハーサルをしておいて欲しい [制]

ラジオ

- ・声を出して、話してから来局して欲しい [制]
- ・スタジオの「無音」状態に慣れること [制]
- ・ペーパーノイズに気を付けて [制]

授業では、受講者があまり理解していないような表情をしていれば、授業者は、言い替えたり説明しなおしたりできる。しかし一方コミュニケーションである放送講座では、聞き手の反応が確かめられない。また、多様な背景を有する視聴者を対象とするため、分かりやすい話し方がどうしても必要である。

なお、収録前の個人的なりハーサルの必要が、テレビ、ラジオともに制作側から指摘されている。加えて、ラジオ収録の際の特有のスタジオ環境に慣れる必要を指摘する制作側からの記

述もある。

6) 授業や研究へのメリット

6. 1) 授業へのメリット

テレビのみ

- ・フリップやビデオなどの資料が授業でも使用できる点がメリットである [4回目]
- ・内容の分かりやすいまとめ方という点で参考になった [4回目]
- ・授業ももっと工夫すべきだという考えを持った [4回目]

テレビ講座の場合、フリップやビデオそのものなど、後で授業に使えるものが多い。またこのように、内容の構成の仕方や話し方など、授業に有効な技能や態度などに気づいたという記述もある。ただしそれらを実際に獲得できたかどうかについては、不明である。

6. 2) 研究へのメリット

テレビ

- ・受講者アンケートなどで、研究が社会にどのように受け取られているかを知る良い機会となった。[11回目]

ラジオ

なし

大学は、公開講座を社会との接点と認識しているが、これは多くの場合、社会に大学を知ってもらい、つまり、「社会が大学を知る」という方向である。この記述は逆に、「大学が社会を知る」という方向であるばかりでなく、講座を通して、「大学での研究を社会がどう認識しているかを、大学が知る」という、いっそう深い認識について示したものであり、意義深い。

7) 今後へのアドバイス

テレビ

なし

ラジオ

- ・「放送番組の作り方（大体の流れ）」をあらかじめ教えて頂くと、初めての人はやりやすいと思う。[初]

番組の作り方の手順の説明は、出演者が不安を解消し、完成に至る見通しを持つうえで、必要である。しかし、どの時点で行うのが適切であるか、出演交渉時か、決定後かなど、今後検討すべきと思われる。

8) その他

テレビ

- ・知り合いに見られたのがはずかしかった
- ・秒単位の時間を合わせる事が第一で内容は二の次だったことがショックだった [初]

- ・出演者が専門と異なるテーマを与えられた場合、内容、テーマ、視聴者の関心の接点を見つけるのに苦労する [制]
- ・計画段階から参加したい [制]

ラジオ

- ・顔が映らないので落ちついて話せた [2回目]

顔が映るか映らないかというテレビとラジオの違いは、当然のこのようだが、出演者の意識を予想以上に異なるものになっているようだ。テレビとラジオのこれに対する記述は、このことをよく表している。

なお、本学の場合、制作側はやはり、計画の段階から参加したいという希望を持っている。

6. 回答から得られるその外の知見

1) テレビ講座とラジオ講座の出演者の態度の違い

今回の回答は、総じてラジオの出演者の方が空欄が多く、回答が淡白な印象を受けた。このことから、出演者にとって、ラジオ講座への出演はテレビ講座への出演に比べて、大きなできごと、印象的なできごとではないのだと推察することができる。

しかし、制作に臨む態度や内容選択の配慮を比較すると、ラジオの方に、先端的な研究知見や個人的な経験を、より積極的に盛り込もうとする傾向が強い。また、ラジオは差別語、不快語については、ほとんど記述がない。

以上をまとめると、ラジオ講座の出演者は、テレビ講座の主演者に比して、

- ①出演に際しての大きな気構えがない
- ②内容選択上、より踏み込んだ態度を有している
- ③表現上、避けた表現が少ない

ということになる。以下に、この背景を検討する。

まず、①の、「ラジオ講座出演者の方が出演に際して大きな気構えがない」ということの背景として、名古屋大学の場合、テレビ講座はほぼ全部局から出演者が出るのに対し、ラジオは一部局（あるいは一学科）が中心となって引き受け、その構成員がほぼ全員出演するため、出演を、多少なりとも義務的な感覚、あるいは、日常の職務の拡張した範囲内のような意識で行い、大きなイベントとして意識しなかったということがあるのかもしれない。

しかし同時に、今回のアンケートは、放送での制約などの「授業との違い」という、ある意味で、出演に対する障害・消極面を問う設問であったため、回答が淡白なのは、逆にむしろ、あまり制約や授業との違いを感じずに出演できたという積極的な意味を表しているとも考えることもできる。つまり、大きなイベントとして意識されないということは、障害を感じないということであり、出演者が自由で積極的な態度をとることができたとも解釈できるわけである。

ところで、他の回答も含めて検討すると、そもそもテレビとラジオでは、出演者の基本的な心構えがかなり違うことに気が付く。テレビは「映像+音声」であり、完成された記録作品のようなイメージであるし、収録時にも、衣服に注意し、ドーランを塗られて撮影され、改まった、非日常的な感じがする。したがって、メディアの特性としてはラジオより豊かな表現力を

持っているにも関わらず、出演者の気持ちとしては、内容選択や表現上の自由度が低く、冒険ができない感じがする。しかしラジオはその意味では日常に近い。またそもそも、大学教員は、「話す」ことには慣れており、ラジオで話すことは、日常的なことがらの域を出ないと考えてもよいかもしれない。^{註4}そしてこの点は、次の内容選択の違いにも影響を与えていると考えられる。

次に②の「内容選択の際の踏み込み方の違い」、および③の「避けた表現の違い」の背景を検詞するが、これには制作側の方針の違いも影響していると考えられるが、担当者集団やテーマの違いを考える必要がある。

本学のラジオ講座は先述のように一部局による担当であるため、出演者の専門分野が似通ったものになり、テレビ講座に比してより細分化された内容を要求されたと考えられる。また、「長寿」をテーマにした今年度のテレビ講座に比して、「開発」をテーマにしたラジオ講座では、不快語等の問題が出にくかった可能性もある。

さらに加えて、メディアの特性の影響がある。ラジオでは「視覚的表現ができない」という制約により、具体性が低くなりがちなので、出演者が、テレビより一歩踏み込んで、より積極的に具体的な内容（いいかえれば、よりするどい、あるいは切れ味のある内容）を扱う態度をとる傾向があるのではないか。そのために、個人的な経験談や最先端の主張なども取り入れる。そのあたりが、出演者側の内容選択にも、制作側の要求にも、あらわれているものと考えられる。このことに加えて、テレビとラジオの出演者の出演に臨む態度や障害を感じる度合いの違いも、影響している可能性がある。つまり、ラジオでは、より自由に積極的に臨んだため、内容選択でもより踏み込むことができ、表現も自由に行えたのではないかということである。

そうだとすれば、内容選択の違いは、メディアの違いによる表現手法の違いを直接に意識した結果ばかりではなく、メディアの違いが引き起こす、出演者の出演（制作）態度の違いの結果でもあると見ることができる。

なお、テレビとラジオの出演に対する意識の違いは、次に述べる制作側と出演者との対立の際に、テレビの方がラジオよりも出演者が制作側にひきずられる傾向があることの要因となり得る。つまり、ラジオの出演者はテレビと違って、全く違った世界に入ってしまった気持ちをもたないので、普段の授業とあまりかわらない内容を、あまり制約を感じずに、主体的に選択して番組構成を行える可能性がある。

以上のことから、つまり、ラジオ講座出演者がテレビ講座出演者に比してより踏み込んだ内容選択とより自由で制約のない表現を行ったことの、背景となる諸要因の関連構造の図示を試みた（図1）。

テレビ講座とラジオ講座の以上のような違いは、今後のアンケート設定、出演者決定、出演者へのアドバイスなどに反映されるべきものとする。

2) 出演者と制作側の意識や主張のずれと対立

出演者側と制作側とのずれ、あるいは対立点も見いだされている。それらをまとめると以下のようなものである。

①出演者は誤解を生む表現を避けたいが、制作側は誤解を生むくらいの印象的な表現を希望している。

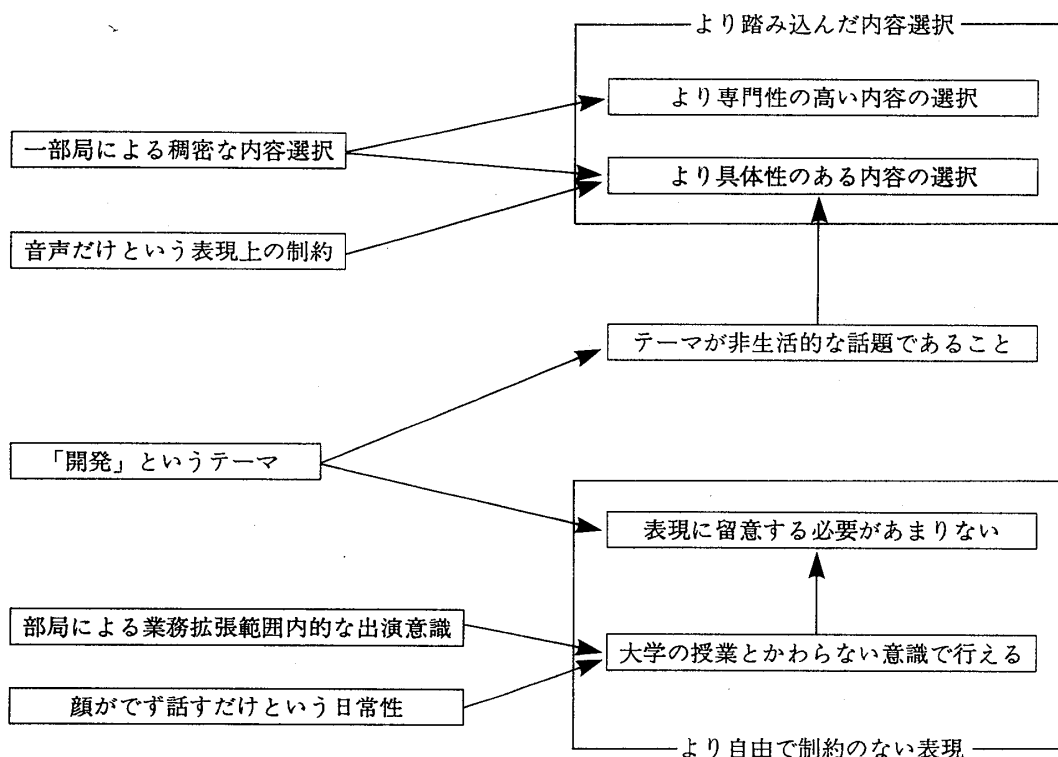


図1. ラジオ講座出演者がテレビ講座出演者に比して、より踏み込んだ内容選択とより自由で制約のない表現を行った背景となる諸要因の関連構図

②テレビの場合、出演者は、私的な経験談、体験談を避ける傾向にあるが、制作側は、入れることを望んでいる。

③出演者は、専門外のことを話すことを避けるが、制作側は、番組の構成上必要なら、関連する内容も話してほしいと考えている。

③の問題は、研究者とそれ以外の人々との間で、つねに存在するギャップであるが、以上の背景をひとことで表現すれば、「研究の論理」と「制作の論理」との対立点であるといえる。制作側が避けることを望むのは、差別表現、不快表現、それ以外には、放送の公共性という立場から問題になるような内容のみであり、その場合も、対立する意見も同時に紹介するようにすれば問題ないので、番組を魅力的なものにするためには、むしろそのような内容を積極的に取り入れる姿勢を有している。つまり、内容選択上、制約を持っているのは、制作側より、むしろ研究の論理から離れない傾向のある出演者側だということになる。研究者である出演者が、研究の論理を大切にしながら、番組ではこういったメッセージを用意することができるが、各出演者に問われており、これが、番組の成否のひとつの鍵になると考えられる。

3) 普段の授業の何を持ち込めるか

回答のなかには、内容の選択、対象の想定などのさまざまな面で、「普段の授業と変わりなくやった」という記述もかなりあった。これらについてさらに検討し、それらが特定の条件下で

成功していると判断できれば、出演者に対するアドバイスとしては、「普段の授業とどう違うか」という否定的な響きの提案だけでなく、むしろ「普段の授業の何を持ち込めるか」という肯定的な提案を行うべきだと考えている。

7. 総合的対策と展望

1) 制作側とのずれを中心とした相互理解と話し合い

上記のような、出演者と制作側の意識のずれや対立は、これまで、話し合いや収録の場において、両者の綱引きを生み、どちらかが相手にひきずられたりする結果になっている。ついては、これらを題材に話し合いをすすめ、相互理解を発展させておく必要がある。しかしそれは、このようなずれを単に解消するためではない。このようなずれの中には、むしろ良い番組を作る工夫のきっかけがある。

井出(1987)は、教育放送に関する豊かな経験を背景として、テレビ放送による大学公開講座の難しさは、学問・研究というそもそも厳密な世界の内容を、映像という、本来涙や笑いなどの表現を得意とするような、曖昧で感性的な表現にこそ適したテレビにのせることだと指摘している。そのため、番組制作を成功させる手法のひとつとして、「伝えたい内容の、映像による感性的な包み込み」を上げ、その好例として、新潟大学で制作した「脳」の番組を上げている。この番組は、脳の機能を中心とした科学的な解説よりも、「脳の素晴らしさ」を表現することに焦点化した点が成功している。このように考えると、やはり出演者と制作側の対立にあたっては、両者の綱引きにおわらず、対立点を止揚して、放送公開講座に適した内容構成と表現を探ることが、成功のための重要な鍵である。

2) 制作ガイド(冊子またはビデオによる)の制作と配布

今後、以上の知見を整理して、番組の制作過程やそれに要する時間、留意すべき点などを示した簡単な制作ガイドを作成し、出演者に配布したり、制作過程や収録場面をビデオにおさめて見せるなどの方策によって、制作に関する見通しが立ち、円滑な制作ができるのではないかと考える。

3) 展望

本研究でとりあげた問題は、大学の行う放送公開講座に関するもっとも素朴な問題意識の対象となってよい問題であるように思われるが、これまで扱われてこなかった。今後は、他大学との経験交流を発展させながら、対策として述べたいいくつかの点をはじめとして、今回の知見が、より良い番組を制作するために貢献できる点を探り、さらに同様の調査を行う必要があると考えている。

本報告は、第11回放送利用の大学公開講座シンポジウム(94.2.22-23、松本市)第2セッション「新しい共同研究体制からの視点」・第1分科会「教材開発のあり方」(1)番組制作の視点から、「1.番組制作における情報の構成方法・伝達方法の大学授業との差異について」(提案機関:名古屋大学・名古屋テレビ放送・東海ラジオ放送、発表者:大谷)の発表資料をもと

にまとめたものである。

なお、今回のアンケートは、先述のように、自由記述の多い、やっかいなものであった。また、公開講座終了後であり、年度末に近づいた、大変多忙な時期に実施された。それにもかかわらず、非常に熱心に御回答下さった方が多かった。ここに記して、アンケートにご協力下さったすべての方々に謝意を表す次第である。

Abstract: Purpose of this research is to examine the difference in constructing the contents and in ways of expressions between teaching courses at university and producing university TV/radio programs for university professors. In order to do this, questionnaires were used. The result was analyzed comparing TV's case and radio's case. Differences of professors' attitude between to the TV and to the radio program, differences between the professors' and the producers' attitude to make programs, and comprehensive strategy to improve the program were discussed.

Keywords: Broadcast education, University broadcast program, Questionnaires, TV, Radio, University courses

注1 放送利用の大学公開講座にも、本学の場合、大学教員以外に、大学図書館専門職員、病院医師、弁護士、などの方々も出演している。

注2 他大学の中には、収録後の編集を制作側にまかせているところもある。本学のラジオ講座では、収録（録音）後の編集は原則的に行わない。

注3 他大学の中には、テキストを執筆中に制作側に見せ、意見を聞いて修正するところもある。本学では、放送公開講座が始まったときからの経緯で、このような方法を取っている。

注4 民俗学の概念を使えば、大学教員にとって、テレビ講座出演が「ハレ」であるのに対して、ラジオ講座出演はそれほどでもなく、むしろ「ケ」であるといえるかもしれない。

注5 井出定利(1987)「制作報告：興味の流れをどう作るか」昭和62年度放送利用の大学公開講座放送番組制作報告書、放送教育開発センター公開講座研究班／放送教育開発センター

放送公開講座に関するアンケート

94.1.12

回答者

_____先生

出演なさったのは、

1) テレビ 2) ラジオ

第 _____ 回

テーマ _____

I. 今回のご出演は初めてですか？それとも過去にご経験がおありですか。

1) 初めて

初めての出演であるために、制作準備や収録の前に不安を感じた点があればお書き下さい。

初めての出演であるために、制作準備過程や録画の際に、とまどったりスムーズにいかなかったりした点があればお書き下さい。(ディレクターとの話し合い、スタジオでのことなどなんでも結構です。)

2) テレビに _____ 回出演した。そのうち名古屋大学放送公開講座は _____ 回

3) ラジオに _____ 回出演した。そのうち名古屋大学放送公開講座は _____ 回

II. 内容面について

1. 内容構成への配慮についておたずねします。該当するものがあれば、番号に○印を付けた上で、具体的に（ごく簡略にて結構です）お答え下さい。（以下同様をお願い致します。）

1) 視聴者をひきつけるような魅力的な導入や全体構成に努めた。

具体的に _____

2) 他の回の内容を配慮した。

具体的に _____

3) その他

具体的に _____

2. 内容選択への配慮についておたずねします。

2-1. 普段の授業では必要の無い内容でも、検討の結果、番組に取り入れた点がありますか。該当するものがあればお答え下さい。

1) 講義内容と視聴者の生活への関わりなど、視聴者にとって身近な話題を取り入れた。

具体的に_____

2) 時事的な話題を取り入れた。

具体的に_____

3) この地域の話題を取り入れた。

具体的に_____

4) 自分の学生だったら当然知っているような基礎的知識の説明を加える必要があった。

具体的に_____

5) その他

具体的に_____

2-2. 普段の授業では取り入れている内容でも、番組の内容としては避けた内容がありますか。該当するものがあればお答え下さい。

1) 私的な経験談、逸話等

具体的に_____

2) 学会でまだ定説となっていないような、個人的な研究知見や最先端の研究知見等。

具体的に_____

3) 自説の展開上必要な他の学説の批判等。

具体的に_____

4) 価値観に関わること等。

具体的に_____

5) 研究的な知見を越えて、社会的なコンセンサスや意思決定に関わると思われる内容等。

具体的に_____

6) その他

具体的に_____

2-3. その他、授業では必要ないのに番組構成・出演では要求された内容があればお答え下さい。

具体的に_____

III. 方法面

1. 普段とは別のことばに言い替えた用語がありますか。該当するものがあればお答え下さい。

1) 専門用語の類

具体的に_____

2) 差別語、不快語の類

具体的に_____

3) その他

具体的に_____

2. 表現の形式等への配慮についておたずねします。該当するものがあればお答え下さい。

1) できるだけ平易な表現に努めた。(具体的に_____)

2) できるだけ具体的な表現に努めた。(具体的に_____)

3) 数式を避けた。(具体的に_____)

4) できるだけ一般化した。(具体的に_____)

5) 表情、声の調子、声の大きさ、話す速さに配慮した。

(具体的に_____)

6) 図や、写真、映像を多く用いた(テレビのみ)。

(具体的に_____)

7) その他(具体的に_____)

3. 放送番組での制約として、大学での授業では不自由なく使っているが、番組では使えずに困ったものがあればお答え下さい。(たとえば実験装置、専門的資料、研究室の環境、実験助手など、具体的に)

○それをどのように解決しましたか。(あきらめた、他の方法を取ったなど、具体的に)

4. 放送番組の特性や放送の機能により、普段の大学の授業よりも効果的に情報伝達(説明)が行えたと思われる面についておたずねします。

1) 大学での授業では普段使えないが、番組の中で使えたものがありますか?(きれいなフリップ、ロケによる映像、映像資料、他の映像からの引用(以上テレビのみ)、アシスタントによる質問、専門家による朗読、効果音等)

○それはどのような効果があったと思われますか?

2) その他、大学の授業よりもやりやすかった点がありますか?

○それはどのような効果があったと思われますか?

IV. 大学の授業と放送公開講座との違いを、以下のようにまとめるとすると、今回の番組出演にあたって特に配慮した点や強く感じた点はどれですか。該当するものに○を付けて下さい(いくつでも結構です)。また、そのために困ったり工夫したりしたことで、上にお答え下さった以外の点があれば、お書き下さい。

1) 教育目的の違い(大学の授業は専門教育であるのに対して、番組は主として教養を高めるための一般教育・社会教育であること等。)

具体的に

2) 継続性・連続性の違い(大学の授業は、通年、半年、あるいは集中での継続的・連続的なものであるのに対して、番組は一回限りの短い時間であること等。)

具体的に

3) 受講者の違い(大学での受講者である大学生あるいは大学院生は限られた専門の学生であるのに対して、番組視聴者は、不特定多数の一般視聴者であること等。)

具体的に

4) 受講者の反応の確認の違い(大学の授業では、直接に学生の反応を確かめられ、また質問

などを受けることもできるのに対して、放送では、それができないこと等。)

具体的に_____

5) 再生可能性の違い (大学の授業は一過性の時間であり、せいぜい学生のノートに記録される程度であるのに対して、番組は、録音、録画して残され、完全に再生される可能性のある講義であること等。)

具体的に_____

6) 場 (社会との関わり) の違い (大学の教室あるいは大学全体は、社会に対して閉じた私的な場としての性格も有しているのに対して、放送は、社会に対して完全に開かれた公共の場であること等。)

具体的に_____

7) 使用するメディアの違い (授業は、テキスト、黒板、印刷資料類が中心だが、テレビでは映像資料などが使える点等。また、ラジオでは逆に音声しか使えない点等。)

具体的に_____

8) その他、大学授業と番組との違いを感じた点があればお書き下さい。

V. 番組構成・出演の経験の有効性

番組の制作にタッチし、番組に出演したことで、今後の大学の授業にも役に立つと思われることがあれば、お書きください。(授業構成の改善、話し方の改善、顔が知られたこと、その他)

VI. 今後出演なさる方へアドバイスして頂ける点があれば、ぜひお書き下さい。

質問は以上です。ご協力ありがとうございました。

初めにお願ひ致しましたように、回答結果は、大変勝手ながら1月28日（金）までに、同封の返信用封筒で「名古屋大学教育学部 大谷 Tel.052-789-2635、Fax.789-2669」あて御返送下さいますようお願い申し上げます。